

〔第30回学術集会 特別講演〕

こどもたちがつくるまち・西成 子ども子育て支援と子どもの声を聞くコミュニティづくり

大阪大学大学院人間科学研究科

村上 靖彦

子どもが助けを求めることを思いつかないだけでなく、大人も見ても見ぬふりをしている。ヤングケアラーの多くの証言のなかで、周囲には悟られないように過ごしていたという言葉が見られる。本人が語りたくないにせよ、語るができないにせよ、大人が見ても見ぬふりをしているにせよ、困難のなかにいる子どもは助けてと言えない、という事実が子ども子育て支援の出発点となるのかもしれない。そしてこのことはヤングケアラーに限らず、虐待、あるいはあらゆる名前の付かない困難にかかわる。

とするならば、かすかなシグナルをSOSとしてキャッチする周囲のアンテナが大事な意味を持っていることになるだろう。

かすかなSOSへのアンテナは、支援者とされる大人たち個人個人の努力や資質によるわけではないだろう。そもそもシグナルがキャッチしやすい環境というものがある。シグナルが感じ取られるためには、当たり前のように聞こえるがまずそこにその子どもがいなくてはいけない。もし子どもが家から出てくることができなかつたとしたら、シグナルを感じ取ることはできない。そして困難に陥ってから、

自らの力で何処かの場所につながることは極めて難しい。言い換えると、困難を抱えようが抱えまいが、もっといえば経済状況にしても障害の有無にしてもどんな状況にであろうが自由に楽しく遊ぶことができる場所が必要だ。そして自分を抑えることなく自由に声を発することができ、聴き取る大人が必要だ。そのような場所は全国に少しずつではじめてるように思われる。

そして子どもが安全に暮らすことができるためには、親の生活もまた安定している必要があるだろう。社会的困窮が目立つ地域の場合、親への支援は子どもを支えることに直結している。

大阪市西成区の子育て支援は、少なくとも半世紀にわたる地域の支援者たちの継続的な取り組みによってそのような場所をつくりだす試みを行ってきた。複数の居場所のみならず重層的なアウトリーチの実践によって、場合によっては妊産婦のころから各家庭へとアプローチしはじめ、支援が成人になるまでつながっていくようなそういうコミュニティの作り方についてお話をした。